

転封考

史料編

藤井松平家文書 (二)

谷口昭

五

丹波龜山 御居城中 覚書
 心休覚書抜
 掛山蔵

一慶安元年子ノ二月廿七日未ノ刻、龜山へ御着被成候、旅籠町喜助処ニ而御上下被為召、御上使町宿江御座被成候、石川弥左衛門様・曾我又左衛門様・佐々権兵衛様江御出被成

候、御三人御一所ニ御座候而御対面被遊候

一御城御番ニ罷有候先代之衆、何も御城ヲ罷出候様ニ御上使方被仰遣候間、被罷出候、此方ノ衆菅谷三郎左衛門其外中小姓衆十人斗、御先江御城へ参、一ノ御門前ニ而行違申候、一御はやを以御指物竿引目の御弓一張持セ、土屋文左衛門大手ニ罷有、御先達而御供仕、御城ニ而 御意ヲ窺、御書院御床にかさり置申候、

一大手御門際へ御旗竿、其次御鉄炮御弓御長柄御持筒御持弓御持鐘御小道具迄、引続行烈のことく物頭所々ニ而馬方をり罷有候、騎馬之面々乗掛衆ニ至迄馬之際ニ罷有、巻ノ左右次第御城江御供仕候、馬を立替候義、猶御目付衆指図次

第二可仕由被 仰付候、

殿様御城江入御被成候刻、惣御家中何も御供仕候、其節若堂吉人草履取吉人挟箱持吉人召連可參候、道具八面々馬ノ際二指置候様二被 仰付候、大手御番二罷有候物頭之道具斗内江入候様二被 仰付候、

殿様御城江御入被成候刻、御鉄炮之者なと猶並罷在、御鉄炮之袋ヲ取腰二挟ミ、五挺二吉人宛火縄に火ヲ付罷在候様二兼而被 仰付候、

大手御番所二御鉄炮十五挺、御弓拾張、御長柄十本、棒十本、物頭吉人、与力二人被 仰付候、御鉄炮御番所内江入不申、表二立ならへ置可申候、棒持候御足輕御門兩方二五人宛罷有候様二被 仰付候、但御上使御帰迄之義二御座候、御足輕十五人、御中間五人被指置候付、御上使御城二御座候内、上下着仕罷有候者廿人程兼而被 仰付候、

追付御上使石川弥左衛門様・曾我又左衛門様・佐々権兵衛様御城江御越被成、於大書院熨斗御出し、御祝義之御挨拶被 仰付候、御三人様年寄共被召出、殿様江弥左衛門様被仰候八、当城被仰付候間、難有可被思召候と被仰渡、

右御兩三人様へ色々之御馳走被成候、木具小角地紙等金銀之御膳部二而御料理被進、御酒宴之砌年寄共被召出、御盃

被下、町屋江御帰被成候後、殿様町屋江乍御暇乞御見廻被成候、御三人ながら御万ノ御礼八不申及、色々御馳走之御礼被仰候、御三人則氷上へ御越被成候、

御城二岡部九良兵衛寢番仕候様二被 仰付候、一町奉行所左衛門町中見分仕、同心共二節々廻り申様二被 仰付候、

御家中屋敷々々に町人番致候者共、何も御門内不残出し候様二被 仰付候、

飛脚等二而も他之者御門ノ内へ一切入申間敷候、家中又者二而も名ヲ誰のものに候哉と承届、出入為仕可申候由被 仰付候、

御城并御天守其外二、何二而も改受取申事無之、屋敷々々帳二而請取申候、

御本丸御書院御床二押太鼓志ツ御座候、

御門々番所、御足輕御番致候者人数彼是 菅谷三郎左衛門・師岡加兵衛見分仕申付候、

同廿八日、龜山御入部為御礼、丹羽新右衛門江戶江被遣候、同日、殿様家中屋敷共被成御覽候、

同日、菅谷三郎左衛門・大寫九郎左衛門・浅見奎之助・師岡加兵衛屋敷被下候、

同日、御城米井出金左衛門・嶋川太郎兵衛兩人受取申候、

龜山近在之庄屋共立合セ、升目を立申候、俵人五斗一升余或八五斗八合御座候、都合二千石受取手形兩人いたし、主水様衆二相渡申候、

同晦日、御天守二御道具在之候分、改候役人田中市兵衛・高瀬七郎左衛門・中山三左衛門被 仰付候、何二ても無之候鉄之たて志ツ御座候、

同日、脇々二在之候御道具、原孫兵衛・中村清太夫・井出金左衛門改被 仰付候へ共、何も無御座候、

所々番所二自然先代之道具有之候八、取のけ候様二右三人二被 仰付候、

三月二日、諸色之改人それノ之役人、田中・懸川同前二被 仰付候、尤役人八替り申候、

大寫九郎右衛門・浅見奎之介、前日家中屋敷々々見分致書付置、一々被申上候、

同三日、岡部九郎兵衛・篠崎七右衛門・寺尾弥右衛門・鈴木角太夫・信太金弥二屋敷被下候、

四日二惣家中へ屋敷被下候、上中下見分致、知行高二応、其なミノ於御前圖取二被 仰付候、又敷物戸はめ迄紛失致候二付、何も高百石二金志兩宛被下候、御詰衆御役人衆

それノ二金銀被下候、

同五日夕御領分庄屋肝煎、師岡加兵衛所江召寄、万事改申候様二被 仰付候、

寄合申候者共之覚

師岡加兵衛 小幡七太夫 牧野権右衛門 飯田清兵衛

川合猪左衛門 木村与三右衛門 太田原五郎右衛門

中村惣左衛門 西尾善左衛門

右十四日迄相改申候、前広触状彼是申渡候、田中・懸川同

前二仕候、高三万八千石二村数百廿二里、

御城へ御客御座候時分八、御広間二相詰候衆、御馬廻り八九人ツ、五番二御定、御書付中之間二被 仰出候、御目付

中番々穿鑿被致触遣し候、町二而御馳走被遊候時八、右之衆人不申候、旅籠町市右衛門处、前々夕御馳走所二御座候、

自然御家中町中共二火事之節、御留主居番衆月番御目付八御城江相詰可申候、物頭之分八組ヲ建、大手・古世・かみ

成御門・西御門・保津御門、其外御城米蔵・御対面所へ相詰候様二、是も中ノ間御書付被 仰出候、

於京都火事之節、御出被成候義も可有之候、将又家老共ノ中吉人被遣候義も可在之候と御意被成候、御弓鉄炮御長柄物頭衆名之中之間御張紙二被 仰出候、鋤鍬持參被 仰付

候、
一 火事之節、町奉行八組共二町中廻り候て、万事申付候様二被 仰付候、但當町三組二致、大手・古世・西御門へ相詰申、指図次第二御門ノ内へ入候て、火消候様二被 仰付、尤火消道具持參仕候、

一 菅沼主水様御米も御蔵二詰り御座候、右之御米御蔵出し之義、御城中故主水様衆々太田原五郎右衛門二断候て出し候様二被 仰付候、

一 町御札場芝土居二御座候ヲ石垣二被 仰付候、

一 三月七日、惣町年寄庄屋肝煎不残御城江被召寄、万御法度之覚書沖源兵衛二御読せ、一々御直二被 仰付候、同十九日、惣郷庄屋共召寄、於御対面所二御法度書、右同断二一々被 仰付候、尤年寄共郡奉行御目付何も罷出候、寺社之方其後於 御城御礼申上候、罷出候次第田中同前、

一 覺 庄屋共二一通被下候書付
一 公儀御法度弥堅可相守存、年を経候御法度等、聊失念仕まじき事、

一 吉利支丹并盜賊聞出し訴人仕候は、從 御公義御ほうひ申請遣し、其上二私二ほうひ遣し可申事、
一 殺生堅禁制之事、但山中八鉄炮赦免之札ヲ取其心得可打事、

一 郷廻り之奉公人、鷹匠餌刺殺生人等、手形なくして往来致候者之は相改、則可申上候、并代官給人何二不寄、在々二而人馬遣候事、無手形して一疋客人出し申間敷候事、
一 代官并上下諸奉公人、礼物礼義之儀八不及申に、往来之刻菓子成共出し申間敷候、但商二八不苦事、

一 奉公人男女他所江遣候事、年季之義八不及申二、一季居たりといふ共、郡奉行代官二断なくして一切出申間敷候、但奉公二出候共、商二遣候共、先ヲ郡奉行代官二可申間候事、
一 外より百姓參、領分二有付可申と申候八、竹木米以下可遣候、但不審成者構在之八可為無用事、

一 五人組弥堅可申合候、欠落之者在之は其組方尋出し可申事、
一 免箱成程穿鑿ノ上申付候間、訴訟仕間敷候、

一 前代二相済候公事、非分之方方申出候八、不及裁許、或八籠舎或八過錢可申付候事、

一 公事諸奉公人ヲ頼、何角申間敷候、奉行人へ直二可申出候事、

一 庄屋方方脇百姓二非分申掛間敷候事、
一 皆済以前二在々二而何二不寄つるへ物、堅停止之事、
一 在々悪党無之様二、一郷中二而無油断致穿鑿、隣郷へも互二可相断事、

一 不依何事一味仕之可為曲事之事、

一 懸之諸勝負、堅禁制之事、

一 奉公人、在々二おめて押買狼藉并女くるひ、惣而不作法之儀在之は、急度可申上事、

一 田作少もあらし候八、五人組之義八不及申二、其村中可為曲事候付、山林居屋敷二至迄竹木猥二伐採申間敷候、屋作等致候八、郡奉行代官へ相達候而、用之分手形ヲ以相調可申事、

一 往還之旅人上下ヲゑらはす、人馬滞無之様二可出候、

一 付往還の人喧嘩口論仕候八、近辺之百姓出合、事二不成様二可仕候、手負死人出来候八、双方留置、郡奉行代官へ可申間候事、

一 手負其外あやしきもの之は留置、早々可申上候事、

一 衣類食物等儉約ヲ用、少も不似合義仕間敷事、

一 牢人二一切宿借申間敷候、但往還一夜之義八不苦候、縦何様之者たりと言共、一宿上滞留致候八、子細を郡奉行代官二相断可任指図事、

一 不依何事二他領之者ノ請二立申間敷候、但不叶義於在之は、子細ヲ郡奉行代官二断可任指図事、

右廿三ヶ条堅可相守者也、仍如件

慶安元年子三月十九日 龜山
一 百姓用なくして 田中・懸川 節々出入仕間敷事、
此一ヶ条田中・懸川二而八御出シ被成候、 何村 庄屋
町二御立被成候御札之覚 条々
一 公儀御法度堅可相守事、
一 往還之上下、毛頭滞無之様人馬可出事、
一 町中火之用心堅仕、夜番夜廻り少も油断仕間敷事、
一 諸奉公人、町人百姓二難渋申掛、諸事狼之義於有之は急度可申上候事、
一 町人百姓、万奉公人慮外仕間敷事、
一 奉公人、男女共二無断して他所江一切出し申間敷事、
一 手負其外あやしき者有之は留置、早々注進可仕事、
一 町中諸役等如前々可為勤事、
一 懸之諸勝負堅停止之事、
一 衣類食物等儉約二可仕事、
一 竹木一切伐採申間敷事、
右之旨堅可相守者也、
慶安元年子三月三日 御名

一 御伝馬早乗物継飛脚之義八不及申二、往還之上下毛頭滞無之様二人馬可出事、

此一ヶ条田中・掛川二而八御書付申候、

一新銭鑄之御札・吉利支丹之御札八田中・懸川同前二御立被成候、町御札場二八数三枚立申候、在々八御札場二新銭鑄・吉利支丹ノ御札二枚立申候、

一 田中・懸川二而町在々へ御借被成候吉利支丹改心付ノ覚書、
一 龜山二而八御出被成間敷由 御意被成候、

一 中ノ間御張袴、田中・懸川同前二御書付申候、

但シ錢湯へ入申候義無用ニ可仕由、一ヶ条御書付御座候、

一同八日二御細工初、於 御城御普請奉行都筑助左衛門二被

仰付候、其日朝大手御門二而かねヲ当申候義、佐藤治部右衛門相調申候、助左衛門二銀子壹枚、次部右衛門二金子二歩、大工頭老入二代物壹貫文、町大工二人二壹貫文宛、助左衛門組之者廿人二代物三貫文被下候、

一同日、町在共二五人組改人被 仰付候、万改ノ次第手形等

迄田中・掛川同前二被 仰付候、改人被 仰付候名前懸山四郎右衛門・久世市左衛門・大井三郎右衛門・山本小右衛門・坂部二郎左衛門・田中一郎兵衛・大橋五右衛門・中川安大夫・柳田源左衛門・川村市郎左衛門・山崎半兵衛・中

山三左衛門・熊谷六左衛門・井出金左衛門・内藤茂左衛門、右三人ツ、一組二被成、御歩行目付老入ツ、御添被成候、一同日、御城米之内御家中へ御借米、高百石二米五石ツ、被仰付候、尤御扶持方二モ相渡申候、

一 大手・古世・かミ成御門・西御門・保津御門二番仕候者共御法度之趣被 仰付候、

一 御番所二おゐて不断不形義無之様二相噴、人数不足不仕、御番代敵蜜二可仕候付、御門前掃除油断仕間敷事、

一 御番所二而自然下々喧嘩仕出し候か、狼藉者在之は御門ヲたて召捕可申候、は向ひ候八、討留可申事、

一 他処方参候者一切入申間敷候、御使飛脚は状ヲ受取、御城江指上可申候、初飛脚参候由所左衛門方迄可申候、御家中江参候八、其処江寄セ状受取セ可申候、其主人方断二ヨリ御門之内江入可申事、

一 暮にて内方出候者八、其主人断次第通可申事、

一 米并荷物包物以下、様子承届通シ可申事、

一 手負出候八、留置、御目付衆へ断、指図次第通可申事、

一 火事何事二出来候共、御目付衆指図なくして出入共二通申間敷候、棒ヲ持御門之側二火移候迄可罷在事、

一 御番所火ノ許大事ニ可仕事、

一 御夜詰過、御門をたて糸ひ錠おろし可申候時、六ツ打候八、則御門を明ケ可申候、御道具鎚受取渡し慥ニ可仕候、御番所之前後不審成者有之八改見可申事、

慶安元年子三月九日

師岡 加兵衛
浅見 李之介

大鷹九郎右衛門

菅谷三郎左衛門

御入部之時分たれ、二御用二立セ町人共二御小袖代物被下候 覚

一 御小袖壹ツ喜介二被下候、是八御上下被為召候御宿仕候、御小袖壹ツ彦之進二被下候、是八当町惣年寄一人二而御座候、代物三貫文ツ、市右衛門・勘右衛門二被下候、是八水口迄御迎二参候、代物二貫文ツ、小次郎・五郎左衛門・茂左衛門・次郎左衛門、是八町中二口ヲ聞申候者二御座候、三貫文ツ、半四郎・六介・喜兵衛二被下候、是八御馬宿仕候、代物三貫文彦兵衛、是八御鷹之御宿仕候、代物二貫文九十良・勘之丞、是八御馬宿之下宿仕候、代物壹貫文ツ、喜介・九十郎・九兵衛・弥兵衛・猪兵衛・理兵衛・与左衛門、是八御荷物宿仕候、

一 牢人被召出、新屋敷被下候二八、材木縄竹筵日かやなと少々被下候、又八右積りにて金銀なと被下候者モ御座候、

一 年頭二与力共御礼仕候義、奏者番衆誰之与力、何と申者二而御座候由披露被申候、然処二与力分知行高、手前高之内二御むすひ被下候、以後八御礼不被仰付候、

一 在々庄屋共之内、其外二モ可然者二は三人扶持ツ、被下候、不断何之御用モ不被仰付候、右拜領仕候者とも難有可存候、御用モ被 仰付候様二常々奉願候、

一 樹木なり物御台所江指上候へ八、当分相場二代錢被下、但シ木珍柿八壹ツ二付錢二文宛、先代方被下候由二御座候、渋柿八三步一木主二遣し、三步二此方へ取申候、則其処方御細工所江持参仕候、但目付ヲ出し、村々帳二付申候、

一揚梅別野之内杉生村・小泉村二木数五七本御座候、毎年三分二御台所へ納申候処、承応二年ノ年方御赦免被成、壹本方小籠カゴ壹ツ宛指上申筈ニ被仰付候、

六貫五百目 御足輕老人分
六貫目 御駕之者同断
四貫目 御中間同断

一籾米カシと申候て、廿壹石式斗式升先代々町在々方納來り申候、岡部内膳様・松平將監様へ御知行二相渡り申候村々方納申候、織部様へ新付二渡り申候村方八出し不申候、殿様御入部子ノ年方右之米御免被成候、切又町分方人足五百人毎年御出被成候筈ニ先代方定來申候、人足御出不被成候へハ、銀九分ツ、出し申候、四百五十目ノ銀子承応元年巳ノ年方御免被成候、

一御詰衆・御小姓衆馬壹疋宛相渡候様ニ被 仰付候、
一役人ニより半駄賃被下候者モ有之、
一江戸詰小姓衆・中小姓衆、其外御扶持方取申候者ニ、定扶持之上ニ一老人半扶持宛増候而被下、塩贈新二御構無之、御長屋ニ而自分贈二仕候、

覚

一御家中江戸御供、知行取分ニ被下候夫金御定ノ覺
高百石方百九十石迄 金子一兩
高二百石方二百九十石迄 金一兩二分
高三百石方四百石迄 金二兩
高四百五十石方六百石迄 金三兩
高六百五十石方八百石迄 金四兩
高八百五十石方千石迄 金五兩

一今般方々乞食火付有之候て被捕候間、在々弥油断仕間敷候、在処ニ有之乞食之外、一円入申ましく候、不審成乞食非人參候は捕置注進可仕候、惣而往還之者飛脚等ニても、一夜之外弥在々ニ而宿借申間敷候、不審成者ニ候ハ、留置可申上事、

御供衆荷物賣目之定
拾貫目風代共一 御步行衆一人分
八貫目 御台所廻り同断

一其郷ニ而親ニ被追出候不届者カ、惣而其所被追払候者ハ、立歸參候ハ、捕候て可申上候事、

一盜人之義、一村切ニ晝夜申合、見付聞付候ハ、声ヲ立、早々出合搦捕可申候、但道具ニ而かんと致候ハ、討留申候ても不苦事、
一宗門之義、弥念ヲ入可申事、

一何ニ而も訴訟之義有之は可申事、
右之通體ニ可相守候、火付并徒者とらへ候ハ、御御可被下者也、

慶安四年卯十二月廿一日 御郡 野間 仁兵衛
村上清左衛門

右在々へ廻候様ニ卯之暮ニ出候、

水上へ戸祭七郎左衛門

一別院之内、御領分田能村ニ殊之外雉子多ク御座候、就其御在 城之時は御泊りニ冬春御座被成候、物数毎度百四五十方式百ノ余、其外鹿狸苑なとも御座候、

覚

一田能村御供中宿致候者、并御鳥屋場壹間四方之処ニも、それ〱二代物被下候、村中之者雉子宛取上申候へハ、代物など被下候、其外庄屋分之者ニハ、別而御帰之刻銀子代物被下候、難有殿様ニ而御座候と申候、

一自然おい鳥狩被遊候時分ハ、在々方セ二人足罷出候得は、
一曰三度ノ御扶持米被下候、

覚

一百姓言人も遣問敷事、
一竹木きり申者候ハ、可申上候、惣而何ニ不寄百姓迷惑かり之義、在之者可申上候事、

已上

一竹木一切伐採申さず様ニ、下々念入可申付候、宿々之義ハ不及申ニ、百姓迷惑不致様ニ心得可在之候、
付往還之者滞無之様ニ可致候事、
一鉄炮勝負之事、雉子・鹿・狸あたり物数次第、一ツ二付五五ツ取可申、はつれハいくはなしとのせんさくニ不及、縦はなさすといふ共、朝晩共ニすかへり八五五ツ宛出し可申候事、
一里ニ向鉄炮打申間敷候、惣而矢先成程念入可申事、

十一月廿二日

右八御家中御供衆へ被 仰出候、

一 御供中定りの御扶持方二新相渡シ申迄二御座候、

一 十一月廿八日二御家中へ物成米被下候義被 仰出候、龜山

納米壹俵二付五斗八九合、或八壹升入少上有之候分も五斗

之勘定二仕、高百石二四拾石被下候、右之内高二心シ、氷

上郡二而百石二付納米拾三石五斗宛相渡申様二被 仰付候、

馬飼料糠藁之義、田中・懸川同前二被 仰付候、

覚

一 兼々申付候法度之趣、侍中町在々迄勿論無失念相守可申候、

町在共二宿借申義は、右条目之内二て候、相違有間敷候、

宿かり可申と申もの、不審成躰も候ハ、心付留置、龜山へ

註進致候様二可申付候、龜山町并通之町中一夜之宿借候共

念ヲ入承届借可申候、不審成様子候ハ、右同前之事、

付売買人山伏行人心付可申候、

一 火之用心、城中侍中町在共二油断仕間敷候、昼夜夜廻り、

峠へ遣候者も弥堅可申付候、

一 右条目之内たりといへ共、弥侍中子共迄も龜山方外へ罷出

候事、堅可申付候、

一 龜山中町迄も少も氣つまり成躰有之間敷候、

一 振舞之義²⁾一切仕間敷候、当座之参会料理之義ハ各別之事、

一 見心の小袖、さらしの帷子等結構成類之着物、老若女中共

二一切仕間敷候、以来致候ハ、絹紬木綿地布以下、ケ様

之軽物相調可申候、付屋作修覆之外一切仕間敷候事、

一 京都へ繫々飛脚等二而も遣し申間敷候、用之義申遣候共、

用たし候へハ立帰二可申付候、病人并用所之者出京之事、

常々念ヲ入候儀二候へ共、只今之折柄一人不叶様子二候ハ

、何も申談遣し可申候、

一 何様承雜説申候共、龜山中二而沙汰仕間敷候、今程²⁾慶説申

事二候間、其心得可在之候、

一 江戸江下候飛脚等も常々之事二候へ共、猶以万事念ヲ入

其者二も能々申含、何時も弥兩人宛指下可申候、

一 京都辺之様子取沙汰雜説と言とも、無油断龜山江申越候様、

田中五兵衛方へ能々申遣、何色之義も又此方江可申越候、

一 京都方町人等為見廻参候共、馳走二及間敷候、五郎右衛門

二挨拶為致、早々返し可申候、

右之通大形条目二在之義も候、弥以念ヲ入可申付候、已上

明曆二年酉三月十一日

一 右同月十八日江戸方被 仰下候而、何も江申渡候、

一 御知行方・御普請方・御勝手方、何色二不寄諸事いろひ申

役人元方衆々中、寅之年方太田与三左衛門・中村惣左衛門

兩人被 仰付候、尤誓紙仕候、

前書 本方衆

一 御役万端依怙鼻肩ヲ不存、無遠慮相勤可申事、

一 御役人私かましき義御座候ハ、見及聞及聊無用捨相断、

其上二も油断之躰於在之は可申上候事、

一 何事二不寄私之いきとをり存間敷候、聊おこりたるてい仕

間敷事、役義聊之音信物受申間敷事、

覚

一 一人持之事、分限二心抱置可申事、

一 当年八式百石以下馬持事無用之事、

一 着類²⁾愈絹紬之事、只今迄所持致候見ふ着類、供使のためた

はい置可申事、

一 互ノ音信物一切無用之事、

一 振舞²⁾愈無用之事、自然之つき合互給之物いたし候義ハ各別

跡之定のさい一種へらし可申候、

祝言振舞ハ別則二定有之事、

右於御対面処二惣御家中へ申渡候、已上

寛文三年卯ノ四月五日

自然御家中江御出被遊候時ノ御定

一 御汁 二ツ 一 御菜 二ツ

御肴 二種内はさみ肴 外二御肴の物

後段 壹種

御家中なかま振舞ノ御定

一 汁 壹ツ 一 菜 二ツ

肴一種 外二香ノ物

祝言かましき振舞ハ汁壹ツ肴一種増

常之参会之御定

一 汁 肴一種 一 菜 二ツ内精進物

右 御公儀御定ヲ考相究者也、

右之通寛文三年卯ノ十月十八日二江戸方被 仰下候、

浅見空之助

菅谷主税介

師岡加兵衛

御家中へ御出ノ時御供御定

此内代りく二人ツ、岡部九郎兵衛

寺尾弥右衛門

嶋田地弥三右衛門

大岡 平太夫

麻生武大夫 御小姓五人
 奏者番一人 戸祭求之介 御右筆一人
 歩行頭一人 本木 采女 谷 通庵
 供廻り一人 三人ノ内 竹内三の
 納戸一人 一人宛
 目付一人

一寛文四辰ノ年、吉利支丹宗門改定役二山田忠右衛門・佐藤七左衛門兩人被 仰付候、御家中并町在々共二言人々、子共下人等二至迄相改、旦那坊主ヲ定、証文ヲ取、帳ニも判形致させ申候、
 一出家八本寺たとへ遠国ニ而も証文取申候、

惣御足輕弓鉄炮稽古被 仰付候覺

的八寸
 御弓鉄炮 角四寸

一弓八四立 壹立二巻手矢射払
 一鉄炮二度二四放、取前ひき台場ニて其假薬込
 立放一度目同前

一一日二五組宛可致稽古事
 弓 一組
 鉄炮三組

御火之事
 但弓四立二六ツあたり候へ八代物二十文
 鉄炮四放二而三ツあたり候へ八代物卅文
 立消過錢十文

一稽古御傍筒組方初可申候、但刻限朝五ツ過方可罷出候、
 寛文四年辰之霜月二日

右稽古之時、九郎兵衛・弥右衛門・平太夫言人宛、大目付衆言人、尤頭衆言人宛罷出候、御在江戸之時分八大鷹頼母・師岡三弥・信太源左衛門、右三人之内言人ツ、相添罷出候、
 一慶安元子ノ年二、百目之石火矢拾挺被 仰付候、掛川ニて之御入目方壹挺二付金式分程内二人申候、是八掛川迄之駄賃分程二御座候、明暦元申ノ年二三百目石火矢三挺、五百目石火矢二挺、清太夫二兩度被 仰付鑄立申候、五百目筒二挺御入目壹貫三百二十目宛、三百目筒三挺、御入目壹貫目宛ノ積リ、
 一於合戦野二百五百目・三百目・百目・二百目ノ石火矢町御家中衆へ被 仰付、御在城之時分折々御覽被遊候、何も幕人慥二御座候、

一慶安元子ノ秋、当国福知山二御在城被成、稲葉淡路様夏中方御氣むら二被為成候御された御座候キ、切又御籠城之御

心掛も御座候なと色々二申めぐり候、然共実証知し不申候、右之通色々ノ御された共江戸ニ而も御座候由、かなたこなた御聞合被成候得共、定たる義無御座候、然処福知山辺さうとう申候由、水上御領分方申来候、切は様子無御心許被思召候而、氷上之内御領分黒井と申在処、福知山へ二三リ御座候処へ篠山通り御越被成候、

一兼而被 仰付候八、黒井方直二福知山へ御座被成候義も可有之候間、弓鉄炮鑓持ヲ頭々二召連、直二福知山へ可参候、三郎左衛門・九郎兵衛・奎之助三人三組二致、御家中衆引連可参候由被 仰付候故、騎馬之衆廿騎余ツ、召連、須知迄参候処、淡路様御切腹被成候而、何之替事も無御座候、然共家中八大形ならぬさわき二御座候、殿様黒井より福知山迄御 越被成候、福知山相済申候共、御家中衆八須知方御返し被成候、

一右福知山へ家中衆参候由承候而、此あたり或八京伏見二罷在候牢人衆一騎二出立、龜山江参候替々之跡方須知へ参候者も御座候、左様之者二八御帰城以後御城二而御振廻被下候、御領分庄屋共も左様之心かけ仕候者、同事二被 仰付候、

一御留守居師岡加兵衛被 仰付候処二、御番所并御門々之義

御番相動申候者申付候、御門番二おももの衆指置、其下番二町在共二可然者共夫々二申付候処も少々有之候、

一福知山迄何も被参候は、賄以下遣シ可申候支度相調申候、米大豆八須知辺御領分方直二福知山へ遣シ申答二、御代官衆へ申付置候、
 一石火矢長筒玉薬箱弓箱矢箱火繩箱、其外之御道具段々二遣可申候、人足并牛馬ヲ引添、奉行ヲ付、二ノ御門ノ内二ならへ置申候、牛馬八御門之外御堀際に並能指置申候、
 一御家中乗馬不足二御座候故、在々方駄賃馬ヲ召寄、御家中へ相渡し申候、
 一郷人足須知迄参候者、箆筒持二銀言刃五分、龜山御門番致候者二銀八分ツ、遣申候、
 一在郷馬飼料一日二大豆二升、乗馬二成候而須知迄参候二銀五分ツ、遣申候、
 一慶安二年丑之夏、日光御門跡様御同道被成、御上京被遊候、七月十三日二江戸御立、同九月二日に京都御発足被成候覺書

一箆筒式荷・御鉄炮等艇とひやう一穂・御弓十張・御長柄十本・御馬三疋・御挟箱五ツ・御具足櫃壹・御指物竿壹本・御長柄、御下り之節二八廿本也、台笠立笠御小道具七本、

御跡二御弓立二ツ、御馬一疋・御乗掛騎馬十五騎、但道中二三騎ツ、御供仕候、

一御門跡様二相詰、御機嫌伺申候者、江守金右衛門・曾次左衛門被仰付候、

一御先御跡二騎ツ、飯塚権左衛門・栗津八郎左衛門・中根次郎右衛門・野間仁兵衛・戸祭十郎左衛門・溝口九右衛門・奥山久右衛門・西山久左衛門替り々御供仕候、

一御門跡衆様御宿前後改人、大井源之丞・小泉勘兵衛・村上清左衛門・乙部藤右衛門、右一人宛替り々万指引仕候、

一殿様御本宿へ御昼休御泊り江御先江参、万事申付ル者関五兵衛・土屋文左衛門・沖源兵衛被仰付候、

一桑名船所土屋文左衛門・沖源兵衛被仰付候、

一御宿割岩崎半兵衛・松宮弥兵衛・熊谷十左衛門へ、御荷物奉行永井孫九郎・小川権兵衛被仰付候、

一京都へ御入之時、石川半助・山口九馬助・横田地弥三右衛門騎馬二而御供、龜山方岡部九郎兵衛・笹崎七右衛門被召寄御供仕候、

一御歩行者十人、御門跡様江御借人二被成候、

一御門跡様御供おさへ之足輕八人、内五人八御先、三人御跡殿様御跡おさへ共三人、

御供衆御上下并御在京中御法度書

覚

一日光御門跡八不申及、毘沙門堂門跡へも聊慮外仕間敷候、并御供ノ出家下々迄疎略仕間敷候事、

一喧嘩口論堅停止之事、

一役人之義八不申二、何様之者申候共、ためづく法度つく之訳を以違背仕間敷候事、

一押買狼籍、其外かさつケ間敷事仕間敷候事、

一竹木伐採申間敷候、付田畑うへ物あらし申間敷事、

一女方若衆方、堅停止之事、

一役人之外、両御門跡之衆と参会仕間敷候事、

一役人之外、用なくして町あるき并門立仕間敷事、

一自他共二不法法之義在之は、目付役人之義は不申二、誰二而毛見及聞及次第、可申聞候事、

右之条々、今度道中在京中堅相守可申候、若 於相背は、後日二聞候共、急度曲事二可申付候、又若党中間小者狼之者在之は、主人可為越度候、以上

慶安二年丑七月十日 御名

一御在京中は御供衆御扶持方、上巻升五合、下巻升相渡し申候、宿錢八御賄方方払申、知行取之分八償二而被指置候、

宿錢同断、

一慶安二五年・承応元巳ノ年、兩年二琉球人參候二付、五味備前様・水野石見様方送り人馬之御書付被下候、下り二八伏見方関迄、上り二八石部方伏見迄右之通之道積り、高一万石二人足巻人半余、此銀十一匁九分ト被仰下候、御高之内保津村千石八筏役御引被下候、高堀村大工役之義、御城へ国役相勤申候、其外足輕屋敷之分も此方方銀子遣し申候、右之代銀京伏見入札致候者二相渡し申候、使石川九太夫二庄屋共兩人指添遣申候、

一承応三年末ノ夏、朝鮮人来朝二付、板倉周防守様方送り人馬之御書付被下候、下り二八淀方彦根迄、上り二八守山方淀迄ノ道積り、高一万石二付人足十八人、此銀子二百八拾八匁九分、巻人二十六匁五リノ宛、保津村千石筏役分御引被下、高堀大工役足輕屋敷八此方方銀子遣申候、右之銀子佐脇弥五右衛門二庄屋兩人指添、京伏見入札致候者二相渡し申候、

一馬数御高二八足鞍數十口、右之積り御座候へ共、自然馬煩或八曲なと致候ため、馬式足鞍二口余分ヲ越申候、家中馬八上下之積り二御座候、

一乘馬数遣し候分御馬陸方六疋、御家中馬山本小右衛門・小

幡七太夫・人見弥三兵衛・奥山久右衛門・野間次太夫・曾我平左衛門・大橋五右衛門・本木八郎左衛門・田中四郎兵衛・大西郷右衛門・松野与兵衛・石谷六郎兵衛・鈴木助之進・萩原十郎兵衛・栗津八郎左衛門馬遣申候、

一金三十疋両式歩四匁宿賃馬飼料、其外万事入用之分遣申候、役人目帳二奥山久右衛門指図加判有之、

一馬取共唐人二対し慮外不致、其外不法無之様二下知可致旨、奥山久右衛門二被仰付被遣候、

一口付中間沓持共二廿五人遣申候、

一琉球人・朝鮮人来朝之節、入札致候京伏見之者之覚横大路次左衛門・京川口屋五郎右衛門・伏見大和屋清左衛門・伏見池田屋忠右衛門、右四人

板倉周防守様方ノ之御書付ノ写

去ル末ノ年朝鮮人来朝、江戸参向之時送り人馬覚

一人足六百三十人

一淀方江州彦根迄

一荷馬八百四十四疋

右断

内百五十五疋はたせ馬二而出ル、

江戸方上り之時

一人足千五拾人

江州守山方淀迄

一荷馬八百九十疋

同断

内百五十五疋はたせ馬にて出ル、
以上

去ル未ノ年朝鮮人来朝、江戸参向之時

一五畿内高合五十万石

此割

乗鞍馬八十八疋 是八五畿内面々方高一万石二馬式疋ツ
、鞍二口六分ツ、口付二人ツ、

鞍替具百十七口 但口付一人ツ、

今度朝鮮人来朝、去六月廿七日之日付二而申来候、朝鮮之
信使大坂江着岸之義、慥成事不申来候へとも、大形八来ル
十五日時分二可為着岸と何も推量申候、人馬之員数此以前
二替儀八有之間敷由、对馬殿方申来候間、先年未ノ年来朝
之人馬写遣し候、大坂二三日、京二五日、此以前逗留申候、
其積り被致、二三日も前二人馬可有御上セ候、以上

七月九日

板 周防守

追而申候、人馬受取渡之人未相究候間、我等之者二請取渡
候所可有御尋候、猶又馬鞍奉行八馬乘衆不残、馬一疋二歩
行衆言人ツ、合点も有之人可有御付候、馬も疋足りんじ
ヲ可有御用意候、馬煩も難斗候 以上
松平伊賀守殿内

大鷹九郎右衛門殿
菅谷三郎左衛門殿

宗对馬守様方之御書立

- 一小轎 三々 十式人 一大轎 三々 六十人
- 一大旗 式々 八人 一毒縣 式々 四人
- 一交倚 三々 六人 一大鼓 壹々 四人
- 一日光御香奠持 廿人 一書箱轎三々 三十人
- 一蜜壺 十 式十人 一長持 廿 百拾人
- 一三使手廻物 廿人 一乗物 三 廿四人
- 一上々官判事手廻物 十二人

人数合三百三十人

是八人足入用之分
一上馬 七十五疋 一中馬 百七十疋

是八小荷駄馬御役二出申候二
鞍ヲ覆申候由二御座候、

- 一乘掛馬 百三十疋 一荷馬 二百七十五疋
- 一日本通詞乘掛馬 四十五疋
- 一達長老 乘馬一疋 荷馬拾八疋 乗物かき八人 人足九人
- 一極長老 右同 人馬入用

右門野庄九郎方写参申候、

五味備前守様・水野石見守様方参候御書付之写

今度琉球人来朝、江戸参向之時、伏見方閑迄、同上リ之時

石部方伏見迄送り人馬之割

一高老万石二付 人足壹人半余ノ積リ

日数七分此銀十一匁九分 但一人一日二疋兩七分積リ

一高老万石二付 馬八疋余之積リ

日数七分此銀二十四匁四分 但一日一疋三匁四分八リ

ン積リ

右之人馬御上洛之時之とく、上方御領私領へ可申付旨、
御老中御折紙参候へ共、俄之義在々方人馬出シ候事不相成
候付而、入札ヲ以申付、横大路次左衛門・伏見大和屋清左
衛門式人のもの肝煎、人馬出し候、五畿内・丹波・近江御
領私領并播磨八御蔵入分へ割符如此候、右日用銀駄賃横大
路次左衛門・伏見大和屋清左衛門二相渡候、手形取候様二
丹州御知行所へ可被申付候、以上

丑ノ十一月三日

五味備前守

松平伊賀守殿 家老

水野石見守

今度琉球人来朝、江戸参向之時、伏見方閑迄、同上リ之時
石部方伏見迄送り人馬之割

一高老万石二付 人足式人三分余積リ

日数七分此銀十七匁二分 但一日二匁四分四リノ積

リ

一高老万石二付 馬八分余ノ積リ

日数七分此銀式十三匁三分 但一日二疋疋二付三匁三

分積リ

右人馬御上洛之時之とく、上方御領私領可申付旨、御老
中御折紙参候へ共、俄之義在々方人馬出シ候事不罷成候二
付、於伏見入札申付候処、京都川口屋五郎右衛門・伏見池
田屋忠右衛門落札二而、右一人肝煎、人馬出シ候、五畿内・
近江・丹波御領私領并播磨八御蔵入分へ割符如斯候、右之
日用銀京川口屋五郎右衛門・伏見池田屋忠右衛門へ相渡候、
手形取候様二丹州知行処へ可被申付候、以上

巳極月七日

五味備前守

松平伊賀守殿 家老

水野石見守

一慶安五年辰之夏、矢田明神・篠村八幡宮石之鳥居御立被遊
候、御入目矢田二八疋貫八百三十目余、篠村二八疋ノ式百
目余二御座候、

一矢田鳥居高サ壹丈四尺三寸 廻り四尺二寸 明キ壹丈四尺
篠村八高サ壹丈式尺 廻り三尺六寸 あき一丈二尺

右之石、金木山と申御領分二石山御座候、龜山より二り半程御座候、
一人足数壹万七百十二人 両所之分
右鳥居書付之写 [以下 略]

六

忠周公
貞享三丙寅年正月廿一日
從丹州龜山武州岩附江 御所替被蒙 仰候一件
但岩附江御入部御行列共

二月朔日、此度御所替二付、道中致着候衣服大紋、其外目二立申着類無用可仕旨被 仰出、
同月廿九日、金壹万兩御拜借被蒙 仰候、
同月四日、野間弥左衛門江戸方着、
高瀬七郎左衛門
菅 治左衛門
天野甚五左衛門

右今度御所替二付、御用向之義会所へ罷出、諸事相談可致旨 御意之趣、岡部九郎兵衛・師岡加兵衛申渡、
同月十三日、御城疊表替被 仰付、
同月十六日、御家中之下々当年出代りなし二相勤可申候、給分之義は去年之給金二壹步ツ、増遣可申候、
但他領之者は各別二候 右之趣御目付方申達入、

貞享三丙寅年正月廿一日

一於 御座之間御懇之 上意被蒙 仰、壹万石於泉州御加増御拜領、武州岩附江御所替被蒙 仰候、
一同月晦日、御家中之面々屋敷之義諸事念を入、下々竹木等をあらし不申候様可申付旨、岡部九郎兵衛・師岡加兵衛申渡候旨、御目付方被達候、
一同日、龜山御城之図写指下可申由申来、并御家中屋敷帳を毛仕立指出、

一同月廿七日、岩附御城受取侍中被 仰付、
掛山勘右衛門 鈴木 助之進 大橋五右衛門
江守金右衛門 太田十郎右衛門 天野甚五左衛門
木村与三右衛門 正木 助之丞 松宮 庄大夫
森 新右衛門 喜多嶋市之丞 土屋文左衛門
佐竹与次右衛門 加舎平右衛門 乙部藤右衛門
山本 源 助 岡部定右衛門 野間 瀨兵衛

内藤又左衛門 桂 四郎兵衛 野原勘右衛門
鈴木六郎右衛門 石川 市之進 山田 平兵衛
江守茂左衛門 大橋 伝之丞 太田 平 助
木村 義兵衛 小林 弾 七 麻生市左衛門
鈴木伝右衛門 野口左次兵衛 嶋田甚五兵衛
恒河 玄 伯

一一之御門 物頭 太田 孫大夫
右同断 同断
一御対面所御門 足輕六人
一同所裏御門 下番吉人
一同御玄闔 足輕式人
步行侍三人 江波 左兵衛
沢井市郎兵衛
小嶋 権十郎

右之面々支度次第、妻子同道二而可罷下旨被 仰付、
一龜山御城渡之役人

一同御玄闔 物頭三人 飯塚権左衛門
高瀬五左衛門
菅 治左衛門
大八木助大夫
梅戸宇右衛門
野間弥左衛門
井上 又 助
宇野角左衛門

一御本丸御広間 物頭 中根与右衛門
給人三人 小林源左衛門
小林源右衛門
太田次郎大夫
足輕式人
下番吉人
張番式人
足輕式人

一同御広間 物頭三人 飯塚権左衛門
高瀬五左衛門
菅 治左衛門
大八木助大夫
梅戸宇右衛門
野間弥左衛門
井上 又 助
宇野角左衛門

石段之下 足輕式人
御玄闔鷹之下 張番式人
一台所御門 足輕式人
一吉之御門 物頭 冲 源兵衛

御対面所引渡 家老 岡部九郎兵衛
用人 菅谷 半 七
町奉行 松井八郎兵衛

鉄炮三挺 足輕三人
弓 式挺 足輕式人
長柄五本 長柄之者五人

御対面所引渡 家老 岡部九郎兵衛
用人 菅谷 半 七
町奉行 松井八郎兵衛

勝手

| | | | | |
|-----|---------|------|--------|--------|
| 郡奉行 | 三刀谷 平八 | 一雷御門 | 目付 | 石川 儀大夫 |
| 目付 | 加藤角右衛門 | 鉄炮三挺 | 足輕三人 | |
| 勘定人 | 石田佐次右衛門 | 弓 式張 | 足輕式人 | |
| 医師 | 田村 玄 仲 | 長柄五本 | 長柄之者五人 | |
| 右筆 | 山田兵右衛門 | | 下番忝人 | |
| | 坊主 休悦 | | | |
| | 赤座 新 助 | | | |
| | 猪飼 彦九郎 | | | |
| | 大井三郎右衛門 | | | |
| | 与力 忝人 | | | |
| | 足輕十人 | | | |
| | 足輕五人 | | | |
| | 長柄之者十人 | | | |
| | 下番三人 | | | |
| | 戸倉甚右衛門 | | | |
| | 与力 忝人 | | | |
| | 足輕五人 | | | |
| | 足輕三人 | | | |
| | 長柄之者五人 | | | |
| | 下番 忝人 | | | |

一御勝手二罷在御給仕役

一追手御門

物頭

大井三郎右衛門

| | | |
|-------|----|--------|
| 一保津御門 | 給人 | 蜂谷市郎兵衛 |
| 右同断 | 同断 | |
| 一西御門 | 同 | 山村三左衛門 |
| 右同断 | 同断 | |
| 一黒御門 | | 足輕式人 |
| | | 下番 忝人 |

鉄炮十挺

弓 五張

長柄十本

三ツ道具一組

一古世御門

物頭

戸倉甚右衛門

| | | |
|------------------|-------|--------|
| 一龜山川筋運上木其外諸色帳面引渡 | 郡奉行 | 加治 安之進 |
| | 運上木役人 | 西川甚右衛門 |
| | 給人 | 下小役人不残 |
| | 藏奉行 | 北村文右衛門 |
| | 勘定人 | 布施 新兵衛 |
| | 給人 | 桂 長右衛門 |
| | 菅 | 九兵衛 |
| | 足輕五人 | |

鉄炮五挺

弓 三張

長柄五本

一古世御門

物頭

戸倉甚右衛門

| | | |
|--------|------|--------|
| 一御城米引渡 | 給人 | 北村文右衛門 |
| | 藏奉行 | 布施 新兵衛 |
| | 勘定人 | 桂 長右衛門 |
| | 給人 | 菅 九兵衛 |
| | 足輕五人 | |

一河原町番所

布幕

一上木場番所

一御上使馳走

一峠迄御迎

一同所御茶屋之勝手江

一峠方龜山江道為御案内

一峠方柏原罷出足輕五人ツ、三ヶ所二つくばい居可申事、

一町終迄御迎

一古世迄御迎

古世御門前迄用人式人罷出候様ニと 御意候得共、御上使

御着之刻御用人指合候付、高瀬七郎左衛門・菅治左衛門罷

出ル、

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

一御上使町宿江御着已後、御見廻罷出、 岡部九郎兵衛

菅谷 半 七

一御用為可承松井八郎兵衛も罷出ル、

久世出雲守様江被遣候帳面扣も来、

但侍中之名は無之、

一三月三日、廻船之荷物并御家中之荷物、保津川方大坂迄積

下シ申付、保津村村上五郎助と立合之義、宇野角左衛門・

吉形庄左衛門相勤、陸路下り荷物之義は菅九兵衛・羽山七

兵衛支配可申旨被 仰付、

一同六日、岩附江引越候御足輕御中間荷物之義、江戸詰之刻

八御足輕六貫五百目、御中間は三貫五百目ツ、二候得共、

此度引越二付、頭中願有之、小頭二は式貫目増シ九貫目並

御足輕二志貫五百目増七貫目、御中間二志貫目増四貫五百

目二被 仰付、御借金之義、小頭二は志貫分並、足輕二

志貫、御中間二式歩式朱ツ、被 仰付候、追而岩附二而上

納可致旨、右荷物之外弓組之御足輕八弓一張ツ、御荷物之

内へ入被遣候、

一同十六日、引料御借金左之通、

一引料高百石二付拾式両、夫方上八百石二六兩増、

一御借金高二七兩、夫方上八百石二五兩増之積、

一五拾石方下は百石二十五兩之積、

一 御借金は未々迄百石二七兩之割、
一 御步行並方以上八御給分扶持方高二直シ、人数二構なく
御引料御借用共二渡又、御步行方以下は人数積り、駄賃
旅籠代渡、馬疋疋金壹兩、人疋人旅籠錢金壹歩錢四百文
ツ、

但幼少之子共二而も同前、

一 御詰衆江戸二相勤、親龜山二罷在者荷物有之二付、馬疋疋
之駄賃金壹兩ツ、渡、尤龜山方引越之者は上下之駄賃旅籠
錢引料借用無之、

一 親掛り二而も妻子有之面々八、乗物言挺代金貳兩、馬疋疋
金壹兩、妻子之旅籠錢渡、
但下女は召連不申候、

一 閏三月八日、御城受取之侍中御対面所江罷出、道中御法度
書相渡、下々等不作法無之様二可申付旨被 仰出候旨、九
郎兵衛・加兵衛申渡、

道中御法度書

一 今度岩附江引越候付、道中押買狼藉其外諸事不作法成儀不
仕、面々相嗜、下々迄堅可被申付事、

一 宿賃嚴密二済可申候、非分無之通、宿主より受取手形取可

申候、其上目付之者一篇可承事、

一 荷物御法度之實目相違無之様二可被申付事、

一 自然喧嘩口論、其外如何様之儀出来候とモ、用人目付之者

無指図して其場江罷出間敷事、

一 舟渡二而、船頭并往還之人二我俣不致候之様二急度可申付
事、

一 何方二而も馬方下り候時は、馬を道之一方江付、混雜不致
候様二馬を立、先を見合乗可申事、

一 宿江着已後、下々海道江出し申間敷候、火之用心無油断可
申付事、

一作毛之場江馬を入申間敷事、

一 目付之者役人之義は不及申、如何様之者申共、法度違背仕
間敷事、

一 道中泊りく、宿問答無之様可申付候、并駄賃馬遅く出ル共
かさつ仕間敷事、

一 道中上下共不作法成義無之様二相嗜可申候、

附乱泊²⁾堅停止之事、

右之旨可相守者也、

一 閏三月十日、御城受取之一番立、

掛山勘右衛門 江守金右衛門 正木 助之丞

喜多嶋市之丞

同 万太郎

乙部藤右衛門

内藤又左衛門

岡部定右衛門

桂 四郎兵衛

江守茂左衛門

麻生市左衛門

野口左次兵衛

右御城受取之面々、三番共給人之分は具足櫃持言人ツ、御
借人相渡又、御城渡同前、御目付江は右之外道中之内御足
輕吉人宛御借人相渡又、

一 同十一日、御城請取之二番立、

鈴木 助之進

同 左右衛門

天野甚五左衛門

同 甚之丞

土屋文左衛門

森 新右衛門

加舎平右衛門

山本 源 助

野間 瀬兵衛

野原勘右衛門

同 新五兵衛

鈴木六郎右衛門

同 伝左衛門

堀江甚五兵衛

一 同十二日、御城受取之三番立、

大橋五右衛門

同 伝之丞

太田十郎右衛門

同 平 助

木村与三右衛門

同 儀兵衛

相田平左衛門

佐竹与次右衛門

松宮 庄大夫

石川 市之進

山田 平兵衛

佐藤七左衛門

小林 弾 七

嶋田甚五兵衛

片伊勢 宗忍

一 同月廿日、石川儀大夫・荒木勘兵衛道中御鎮守之御供可仕
旨被 仰付、

一 同廿五日、在中制札之義其俣指置候哉、引払前二取可申候

哉、為聞合一昨日御旗之者兩人郡山江遣候処、今日罷帰
在中制札之義は 御上使御着一兩日前二取申、町之制札は

御上使御着之朝取申候由、則右之通御代官江申達又、

一 同日、無役之面々廿九日迄二番番・二番・三番・四番・五
番と追々出立

一 四月朔日、御城渡之面々御対面所江罷出、九郎兵衛罷出、

御城渡之様子、其外道中之義申渡、御法度書迄モ渡シ、騎
馬之行列奉行西川甚右衛門・村上勘兵衛、乘懸之行列奉行

山本六郎右衛門・沢井市郎大夫、桂川船割布施武左衛門・

山口権兵衛相勤可申候、行列之書付二無之者八先達而大津・

山科迄可罷越之旨被仰渡、

一 同五日、久世出雲守様家老加藤求馬、其外侍中篠村江參着、

一 同六日、出雲守様家老富田外記、其外御城受取之侍中不残
篠村江參着、北川勘左衛門と申仁、求馬・外記方方九郎兵

衛方へ使者二来ル、惣代市右衛門方二而松井八郎兵衛受取、

一 同日、右之一礼二太田次郎大夫、九郎兵衛方方求馬・外記

方江使者二參、対談有之、返答申来、

一 同七日、出雲守様郡奉行岡加兵衛役人河原田作兵衛・勘定
人金子忠右衛門と申仁、惣代市右衛門方迄參、此方役人中

と対談仕度由、依之九郎兵衛申付、松井八郎兵衛・加治安之進・石田佐次右衛門参合、万端申談、御運上木之儀承度由二付、西川甚右衛門も罷出、前々之様子申談、

同日、御上使近々御着二付、旅籠町方西之方九郎兵衛致見分、松井八郎兵衛・三刀谷平八・加藤角右衛門同道、同日八日、旅籠町方東之方九郎兵衛見分、松井八郎兵衛・加治安之進・石川儀大夫同道、

同日九日、会所掃除張替致シ、惣代九兵衛所当分之致会所、是方先手御家中不残面々屋敷致掃除、町屋或八寺方へ罷出ル、九郎兵衛義も専念寺へ罷出ル、

同日八ツ時分、御上使安藤九郎左衛門殿・向坂清三郎殿御着、九郎左衛門殿御宿八村上六之丞、清三郎殿御宿八同八之丞、御家来之宿は別二有之、前広破損繕、畳表替致、別二飯番所式軒立、御足輕一人ツ、張番致シ、暮前九郎兵衛・半七御兩殿江御見廻懸御目候、加藤求馬・富田外記も其節罷出、御逢被成候、九郎兵衛・半七も右兩人江致面談諸事申談候、

御制札、九郎兵衛殿松井八郎兵衛江御渡、今夜中札之辻江立、夜中故御紋付之挑灯二ツ、御足輕二人ツ、張番、

制札之写

条々

一今度当所得替二付而、百石右人言足出之、二日路可相送事、附年貢未進可弃捐事、

一喧嘩口論停止之訖、違犯之族有之八双方可誅罰、万一令荷担八其科可重従本人事、

一猥伐採竹木并押買狼藉停止之事、一家僕之儀、主従可為相対次第事、

一租借之儀、蔵方出候八、借付段於無疑は可返弁事、一借物は可為証文次第事、

一未進方に取つかふ男女之義、可為主従相対次第、二十ヶ年過歟、普代二出置男女於無其紛は勿論之事、

貞享三年四月 日 安藤九郎左衛門 向坂 清三郎

右之制札、翌日十日四ツ前二引申候様二と御上使松井八郎兵衛江被 仰付、則九郎左衛門殿御請取、

御上使江御進物

一手樽 二ツ 一粕漬鯛 一桶
但京酒巻斗入
一鱒簀巻 一折 一漬松茸 一桶

一枝柿 一箱 百五十本入

一蠟燭 一箱 百挺入

一上白米 一かます 一中白米 二かます

一白味噌 一桶 一赤味噌 一桶

一醤油 一樽 一酢 一樽

一割木 五十束 一炭 十俵

一大豆 三俵 一粉糠 三俵

一あらぬか三俵 一藁 十束

右之内、鯛鱒松茸枝柿手樽、以上五色御留置、外は御返進被成候、

同日暮二及、出雲守様役人渡瀬武大夫・岡加兵衛・河原田作之丞、御上使御馳走為案内御対面所之様子見申度之由、惣代市右衛門を以内談申渡候付、三刀谷平八罷出挨拶致御台所江小林佐右衛門も罷出、

御城米積様之覚

一御城米目録書付役人中江渡入、十一日之朝請取可申由、一目録之写
東御城北之端
一高廿七俵上り横四拾貳俵宛
千俵

一奥江三通二而八百八拾貳俵、一通二貳百九拾四俵ツ、
一両脇二百拾八俵

但一方二十五俵ツ、

脇ノ高廿六俵上り横九俵并上

五俵ツ、
貳俵宛有

東御蔵北之端

一高廿六俵上り横四拾八俵宛

千俵

一奥江三通二而八百六拾四俵、一通二貳百八拾八俵宛

一両脇二百三拾六俵、一方二六拾八俵ツ、

脇之高廿五俵上り拾貳俵、前上二八俵ツ、有

北之御蔵南之端

一高廿七俵上り横四十五俵ツ、

千俵

一奥江三通二而九百四拾五俵、一通二三百拾五俵ツ、

一脇二五拾五俵、高廿六俵上り横九俵并上二壹俵有

北之御蔵北之端

一高廿七俵上り横四拾貳俵ツ、

千俵

一奥江三通二而八百八拾貳俵、一通二貳百九拾四俵宛

一脇二百拾八俵、高廿六俵上り拾八俵并上拾俵有

中之御蔵東端

一高廿九俵上り横三俵宛

千俵

一奥江三通二而八百九拾壹俵、一通二貳百九拾七俵宛

一両脇二百九俵、一方二五拾四俵ツ、上二壹俵有

脇之高廿六俵上り横九俵ツ、

同御蔵西端

一高廿九俵上り横三拾三俵宛

千俵

一奥江三通二而八百九拾壹俵、一通二貳百九拾七俵ツ、

一両脇二百九俵、一方二五拾四俵ツ、上二壹俵有

脇之高廿六俵上り横九俵宛

以上

一御城米手形之事、品々方家老中又は役人之内ニモ手形仕候

モ有之由、然共大形は御所替ニ手形無之候、御城米其外請

取候段御上使江申上、御指図を以請取渡仕候上八手形ニ及

間敷由、右役人中被申候付、其段九郎兵衛江申達、相談之

上手形取不申候、

一同夜二入、明日御城受取渡、双方之役人付家人数御覽被

成度由、御上使双方家老中江被仰聞候付、江戸表方相廻り

候帳面ニ銘々縦名付致差上ル、

出雲守様家老方上り候写

御本丸御広間

物頭

給人

同

同

一之御門

物頭

二之御門

物頭

足輕此方同前

御対面所御広間

旗奉行

長柄奉行

給人

同

同

同

同

同所御玄關

家老

加藤 求馬

同所受取

同

町奉行

郡奉行

目付

御運上木并諸色帳面之請取

郡奉行

勘定頭

同所勝手

勘定人

醫師

右筆

保津御門

西門

追手

古世

御城米請取

給人

同

同

同

同

同

同

同所御玄關

富田 外記

舟橋八郎左衛門

渡瀬 武大夫

香藤 市兵衛

岡 加兵衛

田辺 与助

川原田作兵衛

金子忠右衛門

榊原 玄庵

中村五右衛門

柳下 儀大夫

高田弥五兵衛

古河兵左衛門

川井源五右衛門

安井源左衛門

芦川 源八

田中孫左衛門

町田 左兵衛

足輕同前 給人 大森彦右衛門
 三宅番所 給人 大須賀孫右衛門
 同断 給人 今関作左衛門
 上ヶ木番所 歩行目付 足輕式人

一 惣代九兵衛家会所二借申候付、銀言枚被下、
 一 御本丸所々鍵之儀、九郎兵衛・半七、求馬・外記江直二渡可申と存候得共、十一日之朝御用多可有之、求馬・外記と申談候間、帳面と一所二安之進相渡可申旨、九郎兵衛申付候間、鍵箱共二目録相認、又右衛門方々安之進請取置候、

一 龜山御領分村数家数御覽被成度由、御上使被仰聞候付、
 差上候書付与
 一 高三万八千石 丹波龜山領
 村数百拾九箇村 桑田郡・船井郡・多喜郡・水上郡之内
 家数七千百六拾六軒
 人数三万七千九百四拾式人
 内 壹万九千七百拾七人 男
 壹万七千九百拾三人 女
 三百九拾式人 僧
 寺数貳百拾貳ヶ寺
 右貞享二五年之改

一 同十一日之朝明七ツ過、兼而御定之通侍中足輕共二役所々江相詰、御足輕御中間之人割は大橋又右衛門致候、
 一 侍中は不残上下、九郎兵衛・半七はのしめ致着、御門々之侍中は袴羽織、郡山・明石御所替御城渡之時、右之被仰付之旨、就夫此度も如是、出雲守様侍中も同前、

一 村上六之丞・同八之丞御上使御宿仕候付、銀言枚ツ、下、
 陣三軒江銭式實文宛被下、

一 御城二残申道具之覚
 一 からかね三 式十箇
 一 鍵 五本
 一 突棒刺候 式から
 一 からうす 二から
 但中嶋薬合部屋二有
 一 鍵 五本
 一 突棒刺候 二から
 二ノ御門二有

一 鐵炮掛 壹ツ
 一 弓懸 二ツ
 一 棧子 二ツ
 御鐵炮蔵二有
 鍵懸鐵炮掛 御本丸御広間
 押太鼓家二人 御書院床之間
 一 大釜 御台所三ツ
 一 すへ桶 同所壹ツ
 一 かな行灯 式ツ
 先御代方相残候扣を以如此

此外御門々二八水溜桶手桶有、
 一 明日明六ツ打申候と出雲守様御家衆役所々江罷出ル、六半時分御上使御兩人御上下御着、御対面所江御出、双方家老共 上意被仰渡、其以後九郎兵衛・半七・求馬・外記同道二而御本丸江罷越、大橋又右衛門・加藤角右衛門案内、其内二諸事帳面相渡、加治安之進・岡加兵衛二致挨拶、石田佐次右衛門悉相改、田辺与助・河原田作兵衛二渡入、
 一 御本丸所々之鍵目録を以相改、加治安之進・岡加兵衛江渡、松井八郎兵衛・三刀谷平八・舟橋八郎左衛門・渡瀬武大夫互二挨拶有之、
 一 暫過而九郎兵衛・半七、求馬・外記二御本丸引渡帰ル、所々御門々御番所之受取渡相濟候二付、其段双方家老共御上使江申上、何も御対面所退出、
 一 騎馬之侍中乗掛之侍中両所兼而本町二飯家有、双方混雜無之様二致シ、行列之義石川義大夫・加藤角右衛門申付、
 一 岩附御城首尾好御請取相濟候二付、戸田山城守様方為御祝儀御樽着被進候、依之出雲守様江毛京都方箱肴酒松宮新五左衛門相調来候付、箱肴二種樽二為御祝儀被遣候、御使者井上源大夫相勤、
 一 御城渡不残相濟候付、五ツ半時分何も龜山罷出ル、

御対面所之覚

一 鍵懸 御広間 壹ツ
 一 卷臺台共二 御玄關 壹ツ
 一 手桶 御台所 八ツ
 一 まな板 同所 大小貳ツ
 一 手桶 同所 五ツ
 一 かな輪 同所 大小五ツ
 一 風呂かま 同所 壹通
 先御代之扣二御対面所二残ル道具八無之、此度右之通、

一 御城渡不残相濟候付、五ツ半時分何も龜山罷出ル、

行列
小頭 手替三人
旗竿五本 旗箱 二人 合羽籠 二人

中根与右衛門 小頭 手代三人 二人
小頭 鉄炮十五挺 箆笥一荷

合羽籠 二人 小頭 手替三人
大井二郎右衛門 鉄炮十五挺
桂川方曾治左衛門代 小頭

箆笥一荷 式人 式人 高瀬七郎左衛門
桂川方戸倉甚右衛門

小頭 手替三人 式人 式人
弓拾五挺 矢箱一荷 合羽籠

飯塚権左衛門 小頭 手替三人 四人
桂川方松井八郎兵衛 小頭 長柄三十本 合羽籠二荷

太田孫大夫 騎馬曾治左衛門 戸倉甚右衛門 沖源兵衛
桂川方沖源兵衛
松井八郎兵衛 井上源大夫 大米助大夫 粟津彈之丞

山村三左衛門 菅谷 半七 岡部九郎兵衛 押足輕
同断 同断
同断

乘掛 三刀谷平八 加治安之進 北村文右衛門
大橋又右衛門 蜂谷市郎兵衛 小川源左衛門 小林源右衛門

太田次郎大夫 梅戸宇右衛門 村上 又 助 野間弥左衛門
西尾善左衛門 山田兵右衛門 宇野角左衛門 赤座 新 助

猪飼彦九郎 石田左次右衛門 石川儀大夫 加藤角右衛門
押足輕
同断 同断

一惣人数七ツ前二大津・山科、面々宿割之通一宿、御鉄炮弓
御長柄其外御借馬之道具、川口惣兵衛・吉形庄左衛門・杉
野孫右衛門面々二請取、

一同十二日大津方志番立、十四日迄四番立二而岩附江下ル、
但山科方も右之内二而下ル、

一同廿九日、惣人数不残岩附江致着、御家中面々江戸御屋敷
江立寄申儀不仕、品川方御機嫌伺之書状指上、直二岩附江
致着候、九郎兵衛・半七儀は御屋敷寄 御目見仕、御料理
被下、其以後岩附江致着候、

貞享三丙寅年四月九日

一武州岩附御城請取
行列

羽織浅黄絹小紋
小頭 柿之袋二人 羽織せつぷくわ染⁽²⁾
巴居竿 五本 旗之者五人 手代式人
同断

紺ノ袋二人 羽織紺ひろとと 青漆雨覆金紋
旗竿五本 旗之者五人 旗箱

羽織黒絹 羽織紺ひろとと 合羽籠二荷中間
宰領足軽言人 中間三人 単物鼠色

具足櫃 若党 鎗
旗奉行騎馬 五人 草履取
刀筒 挟箱

沓籠 羽織絹あいえり茶 狸々緋袋二人
合羽籠 小頭 鉄炮十五挺
同断 小頭

羽織絹黒 手代三人 青漆雨覆金紋 羽織単物前二同
足軽十五人 箆笥二荷 中間四人

合羽持二荷 中間四人 具足櫃 物頭騎馬 若党
五人 刀筒
鎗 羽織同断
草履取 沓籠 合羽籠 小頭

狸々緋袋二人 羽織同断 雨覆前二同
鉄炮十五挺 足軽十五人 手代四人 箆笥二荷

羽折単物前二同
中間四人 合羽籠二荷 羽織単物前二同
中間四人 具足櫃

青漆金紋
鷲瓢一穗 羽織あいえり茶統替り
中間四人 單物えり茶
弓十五張

物頭騎馬五人 若党
刀筒 鎗
挟箱 草履取 沓籠

羽織絹黒
足輕十五人手代四人 矢箱二荷 羽織木綿ひろつと
中間四人 單物鼠色

羽織同断
小頭 狸々緋袋二人
合羽籠 同断 鉄炮十五挺 足輕十五人 手代四人
羽織同断

羽織同断単物同断
合羽籠二荷 中間四人 具足櫃 若党
物頭騎馬五人 刀筒

雨覆前二同
箆笥二荷 羽織単物前二同
中間四人 合羽籠二荷

鎗
挟箱 草履取 沓籠 合羽籠
同断 小頭 羽織絹淺黄小紋

羽織単物同断
中間四人 具足櫃 物頭騎馬五人 若党
刀筒 挟箱 鎗

羽織えり茶統替り単物鼠色
長柄十五本 長柄組十五人 手代三人 合羽籠一荷

草履取 沓籠 合羽籠
同断 小頭 羽織前二同

羽織木綿ひろつと鼠色
中間式人 具足櫃 物頭騎馬 若党五人
刀筒

鎗
草履取 沓籠 合羽籠
同断 小頭 羽織同断

草履取 沓籠 合羽籠 具足櫃
持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱 草履取 沓籠

長柄十五本 羽織単物同断
長柄之者十五人 手代三人 合羽籠

合羽籠 具足櫃 持弓頭騎馬 若党
式人 鎗 草履取
挟箱

羽織単物右同断
中間式人 具足櫃 物頭騎馬 若党五人
刀筒

沓籠 合羽籠 具足櫃 持弓頭騎馬若党
式人 鎗 挟箱

鎗
草履取 沓籠 合羽籠
同断 小頭

草履取 沓籠 合羽籠 具足櫃
草履取 沓籠

挟箱
草履取 沓籠 合羽籠 具足櫃

草履取 沓籠 合羽籠 具足櫃
指物竿 弓立

町奉行騎馬 若党式人 鎗
挟箱 草履取 沓籠

用人騎馬 刀筒 鎗 挟箱 立笠 陸尺
若党七人 鎗 挟箱 草履取 四人 茶弁当

合羽籠 具足櫃 持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱

沓籠 合羽籠二荷 乘掛馬 馬吉足
鉄炮式挺 手明寺人 弓立 具足櫃

合羽籠 具足櫃 持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱

合羽籠 具足櫃 持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱

合羽籠 具足櫃 持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱

合羽籠 具足櫃 持筒頭騎馬 若党式人 鎗
挟箱

一 惣乗掛、龜山方直二岩附江可相通事、
 一 御上使御馳走人江守金右衛門・正木助之丞、其外廿九日・
 四月朔日岩附へ可相越候、給仕之者八三日迄二可相越候、
 一 四月三日 御上使藤掛采女殿・戸川空助殿岩附江御到着
 一 御宿久保町 平左衛門 猪兵衛
 一 四月五日御城受取、

掛山勘右衛門
 野間 瀬兵衛
 鈴木六郎左衛門
 松宮 庄大夫

合羽籠三荷 乗物 陸尺六人 乗掛
 使飛脚 旗之者式人 押足輕式人

一 裏御門
 鐵炮三挺
 弓 式張
 長柄五本
 足輕式人
 下番忞人
 足輕五人
 長柄之者五人

醫師 若党忞人 長刀
 岡野柳玄 駕 茶箱 草履取
 乘掛騎馬之分 合羽駄荷 押足輕式人

一 召仕之若党中間迄対之衣類可任心事、沓籠合羽籠相調可渡
 事、
 一 行列之面々有人之外、貸人分限二心し可相渡事、
 一 於御下屋敷行列立、朝六時方段々繰出し、荷物馬七時前一
 同出也、裏御門前河岸二並置、行列方五丁程先江可遣事、
 一 越ヶ谷昼休二付、宿割野口宇左衛門遣候事、

一 同御成門脇
 一 二之丸
 鐵炮五挺
 弓 三張
 長柄五本
 菅谷 主 税
 寺尾四郎右衛門
 乙部藤右衛門
 津田 源大夫

玉箱一荷 喜多嶋市之丞 長柄五本
 矢箱一荷 桂 四郎兵衛 三ツ道具
 御城附渡

一 同御広間番士
 石川 市之進 一 明戸口番所
 山田 平兵衛
 岡野 柳 玄 一 車橋番所 幕
 加舎 市兵衛 鐵炮三挺
 竹内 久兵衛 弓 式張
 増井 甚 助 長柄五本
 片伊勢 宗仁 三ツ道具
 坊主忞人 御城附渡
 足輕式人
 足輕八人
 長柄之者五人
 中間忞人
 足輕忞人
 杖突 足輕忞人

一 御城附之武具於二之丸帳面二而請取之、
 相田平左衛門
 森 新右衛門
 足輕式人
 一 追手番所 幕
 鐵炮十挺
 弓 五張
 鈴木 助之進
 野原勘右衛門
 佐藤七左衛門

一 同勝手
 一 中川番所 幕
 鐵炮三挺
 弓 式張
 長柄五本
 三ツ道具
 御城附渡
 岡部定右衛門
 足輕式人
 下番忞人
 足輕五人
 長柄之者五人

一天神曲輪番所
 鐵炮三挺
 一 御城附渡
 御城附渡

長柄五本
玉箱一荷
矢箱一荷

足輕四人
下番貳人
足輕十五人
長柄之者五人
中間貳人

一新正寺口番所

下番壹人
足輕貳人
下番壹人
足輕貳人

一同所張番

杖突

足輕壹人
足輕小頭壹人
足輕貳人

一入江口番所
三ツ道具一組

長柄之者三人
下番壹人
長柄之者三人

一諏訪小路口

一大番所

三ツ道具附渡

土屋文左衛門
足輕貳人

下番壹人

一同町方天神小路入口
三ツ道具一組

一御城米請取

長柄之者三人

一横川口大番所

佐竹与次右衛門
足輕貳人

一渋江口大番所

猪飼十郎兵衛
足輕貳人

一見過口番

安藤何右衛門
下番壹人

一扶持方藏

野口左次兵衛
足輕壹人

下番壹人
足輕貳人

一普請小屋

下番壹人
加舎平右衛門

一会所

徒目付

大工治兵衛
普請手代貳人
加舎 市兵衛
嶋田甚五兵衛
市辺仙右衛門
野口宇左衛門
内藤又左衛門

一御家来下々馳走

木村 儀兵衛
白江 金兵衛
伊藤 惣五郎
林 武左衛門
川村 半助
太田安右衛門
田沢 権大夫
吉岡加右衛門
堀江甚五兵衛
小篤甚左衛門
足立次郎兵衛

一番代り非番之節、火之廻り可致候

大橋五右衛門
天野甚五左衛門
木村与三右衛門
江守金右衛門
正木 助之丞
掛山勘右衛門
太田 平助
加舎三左衛門
小林 源七
鈴木伝左衛門
麻生市左衛門
大橋 伝之丞

一同賄方
一同料理方

下賄壹人六兵衛
買使壹人三大夫
肴方壹人八兵衛
椀方二人庄右衛門
足輕貳人市兵衛
足輕六人

一御上使御馳走

一同家来馳走

一御上便御給仕

一宿割太田原吉左衛門・市辺仙右衛門

一御城請取相濟候段御注進、猪飼市郎兵衛五日四時江戸江籠

越候、
一二之丸御広間番

| | | | | | | |
|----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|
| 一 掛山勘右衛門 正木 助之丞 桂 四郎兵衛 鈴木伝左衛門 | 二 鈴木 助之進 松宮 庄大夫 野原勘右衛門 麻生市左衛門 | 三 大橋五右衛門 森 新右衛門 鈴木六郎右衛門 小林 弾 七 | 四 江守金右衛門 山本 源 助 石川 市之進 大橋 伝之丞 | 五 太田十郎右衛門 内藤又左衛門 山田 平兵衛 木村 儀兵衛 | 六 天野甚五左衛門 岡部定右衛門 江守茂左衛門 | 七 木村与三右衛門 野間 瀨兵衛 太田 平 助 |
|----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|----------------------------------------|-----------------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|

右一日一夜宛可相勤候、

元禄六癸酉年六月八日

一 御老中様御連名之御奉書御到来、明九日五時御登 城被成候様二七之儀二付、九日御登 城被成候様於 御座之間岩

附へ御休息之御暇被 仰出候、

一同十日五時分、岩附於二之丸師岡加兵衛・横田地外記、御家中諸士御徒士並之者共へ、御在所江之御暇被蒙 仰候段 御意之旨申渡之、

一同十二日、横田地弥三右衛門岩附江罷帰、岡部甚平屋敷普請之役被 仰付候、
一同十三日、御家中諸士御詰並迄罷出、此度於 御座之間御懇之被蒙、上意、其上岩附江之御暇御拜領、御満足被成候、此段御家中江為申聞候様 御意之旨、弥三右衛門申渡、且又御入部二付、家中普請等致候義無用二候、致懸り候様は勝手次第第二可致候、尤見苦所有之候八、不及申、繕致候之様申渡候、

一同日、御屋形御普請之役二付、雑賀猪兵衛岩附江罷越、御普請奉行立合、御屋形絵図致、即刻江戸江罷帰候、

一同十六日、三之丸御屋形地祭正福寺江被 仰付、致執行、伴僧大工町三光寺罷出、御布施正福寺江銀壹枚、三光寺へ鳥目老實文被下之、

一 七月十六日、御屋形御普請出来二付、為御祈祷御座之間御書院二而護摩、正福寺執行、伴僧野鳥村光栄寺・慈忍寺法光坊罷出、

七月廿一日

岩附江御入部行列

〔行列次第 略〕

一 江戸御屋敷方千住迄、御先道具老丁程御先江宇野角左衛門騎馬二而押罷越、御徒士目付吉人罷越候、
一 江戸御屋敷朝五時御発駕、草鹿町御昼休、宿割原甚兵衛・萩原加右衛門被 仰付候、岩附御城江同日申ノ下刻 御着座、

一 御祝儀御熨斗 御雜煮御膳、
一 御家中之面々御目見罷出候次第

一 郡奉行津田源大夫・加治安之進、御代官江守茂左衛門御領分境飯塚村迄羽織立附二而罷出候、
一 津久井定右衛門、小奉行中根与右衛門組小頭仁大夫召連、御道筋掃除等申付、郡奉行・代官方五六町程手前二而 御目見仕候、
一 御足輕御長柄小頭共林道五番町入口、羽織立附二而罷出下座仕候、

一 惣町名主共老番町矢場之際、上下着二而下座仕罷在候、
一 内藤又左衛門町手代二人召連、横町入口御門之外二而上下

着 御目見仕候、

但原六左衛門羽織袴着、足立利左衛門羽織袴二而罷出候、一 浪江口御門之内、月番之御目付野間八郎左衛門・山崎彦左衛門上下着 御目見仕候、

一 御物頭、馬廻り中之間、隠居、医師、表御詰並、御徒士並、名倉晝斎・生田宗三、此式人十徳着、并鈴木仁右衛門広小路、乙部藤右衛門屋敷前方会所前迄上下着致罷出、御目見、右列之末桂又四郎・加舎源太郎・森新八・太田権三郎右同断、

一 大嶋頼母・横田地外記・岡部甚平・天野伝八・師岡源右衛門・佐治八右衛門・蜂屋一郎兵衛・木村新助・大八木助大夫・菅谷勘八・橋住伊織・横田地一学・菅谷西次郎、右何毛上下着致シ追手門二而 御目見、

一 加藤角右衛門・熊倉久兵衛・野間弥左衛門・中村清大夫・山本宇兵衛・菅谷主税、長屋末二而 御目見、
一 御徒士目付沢井一郎大夫・寺内太郎左衛門・望月善左衛門、御屋形裏御門前二而 御目見、

一 本方手代、御普請手代羽織立附着致シ、裏御門前二而下座
一 小林佐右衛門・嶋田仁五兵衛、御屋形内にて 御目見、
一 二之丸当番は車橋御門外、冠木御門前にて 御目見、

一横田地弥三右衛門、三之丸御屋形御門地福之外二而 御目見、夫方御先江御案内仕候、

一御納戸御次小姓・児小姓、御広間御玄關二而 御目見、

一大嶋頼母、御着座被遊候為御礼、御老中様方江御使被 仰

付、七月廿一日夜中発足、御借人共上下九人二而罷越候、

一御入部為御祝儀、年寄中・御用人・御近習迄不残御着指上

御目見、

一同廿五日、諏訪明神・久伊豆明神為 御代参官谷主税被

仰付、金貳百疋奉納、二之丸天神・御鎮守江為御代参横田

地弥三右衛門被 仰付、天神江金貳百疋、御鎮守江代物貳

貫文奉納、

一同日、御入部被遊候二付、三之丸御屋形江御家中物頭方御

詰並迄被 召出、御懇之被成下 御意、来ル廿九日御料理

頂戴被 仰付候段、年寄中被仰渡、

一同廿八日、町在中野州庄屋共上下着致 御礼申上ル、

一右同断、寺社御礼申上ル、御朱印知之分八扇子指上ル、

一同廿九日、御入部御祝儀御料理、御家中御詰並迄被下候、

一汁三菜、御詰並迄御茶被下、言番座家老・用人・近習・

馬廻り迄、二番座本方目付中之間より御詰並迄、三番座御

徒士目付方御徒士迄、

一八月二日、加藤角右衛門・熊倉久兵衛・野間弥左衛門、御屋形御普請骨折候二付、御帷子等ツ、被下之、

一望月善右衛門金巻歩、普請手代三人、大工杢右衛門・屋根

師太左衛門・左官作兵衛鳥目巻メ文ツ、張付師式人五百

文宛被下之、

前稿以来、やや間が空いてしまつたが、引き続き信濃国上田を領知した藤井松平家の転封関係史料を五・六として公刊する。前号で紹介したように、上田市立博物館には同家の転封史料がよく整理されて収蔵されている。重複を厭わずその全貌を示せば次の通りである（*印は刊行済）。

* 1 忠晴公田中御城御拝領御入部御行列并被仰出書付類

(寛永一九、正保元)

* 2 掛川御城請取一件 同御入部御行列

(正保元)

* 3 忠山公遠州掛川二而御預言万石之御目録扣

(慶安五)

* 4 龜山御入部覚書

(慶安元)

5 丹波龜山御居城中覚書

(慶安元、寛文八)

6 従丹州龜山武州岩附江御所替被蒙仰候一件

(貞享三)

但岩附江御入部御行列共

* 7 龜山御城渡 御所替覚書 (貞享三)

8 岩築御城御請取候節 上使藤掛 采女様江御馳走覚

戸川李之助様 (貞享三)

9 忠周公 岩付御入部行列諸事覚 (元禄六)

10 忠栄公御代 分限帳 (武州岩槻四万八千石) (元禄七)

11 武州岩附御城御引渡一件 (元禄一〇)

12 忠周公御代 但州出石江御所替諸事覚帳 (元禄一〇)

13 従但州出石信州上田江 御所替覚書請取方一件 (宝永三)

14 上田城残置候武具帳 (宝永三)

15 御先代御領地郡名書抜帳

(田中・掛川・龜山・岩槻・出石・上田)

16 従但州出石信州上田江 御所替覚書請取方一件 (宝永三)

本号では、紙幅の関係で前稿で割愛した5・6を収録したが、5は慶安元年（一六四八）に丹波国龜山に移った同家にとって、入封直後の状況とその後の領知事項に係わる記録となっている。冒頭には、城主忠周自らが上使とともに領分及び城内に入り、城郭の引渡を受ける様子が描写されており、筆者が従前取り扱った転封記録にはない特質をもつ。このと

き上使が三人派遣されていることと併せて、他の転封記録と比較する材料を提供する史料だといえよう。ただし、記録の大半は、同家の龜山領知に関わる記事、および家臣の由緒等となっているので、貴重かつ興味は深いものの、本資料編の意図するところを考え、省略した。

その後、同じ忠周の時代、貞享三年（一六八六）に同家は武蔵国岩槻へ移ることになる。6はその折の記録で、前稿所載の7と共通する部分が多い。異なる観点からの記事も多く、7では省略に委ねた入封の行列次第も、やや煩雑ながら収録した。新領知に入る家中の隊列を眼前に見る想いがするのは、筆者だけではないと思う。

引き続き復刻に際しては上田市立博物館のご協力を得た。記して謝意を表する次第である。